寫眞週報

內閣情報部編輯
一月廿五日・第四十九號・十セン

上海明暗二相

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

お天氣が眞くて暖かい日曜日、南京城外明孝陵に詣でる。奇怪な石人、石獸がずらりと並び長い參道を長閑かな氣持で歩いてゐると、向ふから見たことのある日本婦人と支那婦人が兩手を擡べてやつてきた。南京放送局のアナウンサー嬢とタイピスト嬢だつた。

撮影　内閣情報部

補血
強壯

ポリタミン

衰弱と虚弱に

四百五十醫學博士の推奨する

比類なきアミノ酸綜合劑

病　身体人や衰弱患者にとつて一番大切な榮養素は蛋白質（肉や卵の成分）ですが、蛋白質はそのまゝでは榮養にならず、必ず胃腸で消化をうけてアミノ酸に分解してからでないと吸收されません。ですから、胃腸の弱つた人には蛋白質よりもその消化體アミノ酸の方が遙に効果的なわけです。

ポリタミンはこの見地から牛乳蛋白を採め人工的に消化したアミノ酸を主成分とし、これにビタミンBを配したものです。

從つてのむだけ榮養となつて體重を增し、或は食慾を增し、或はホルモンを增殖し、相俟つて身體を強く丈夫にします。然も頗る甘美味です。

小瓶（二圓五〇）　中瓶（三圓五〇）　大瓶（五圓五〇）　藥店にあり

發賣元　大阪市道修町　武田長兵衛商店

隊員の夢屋さん

1 手に手に鋸を揃つて雑木林に入り込んだ勇士たちは強力を競ひつゝ楢や櫟を景氣よく切り倒す。

2 『枝はきれいに拂つて、これ位の長さに切り揃へてくれ』と炭焼司令がほうり出した丸太を手本に皆は支那式の鉈や斧を揮ふ。

3 切り揃へるとこれをいくつかの恰好の山に積み、枯葉をのせて火をつける。火の廻り具合を見て炭焼司令は『土をかけろ』と怒鳴つた。土をかぶせて蒸さうといふのだ。序でに雨が降つても大丈夫なやうに屋根を作つておく。

こゝは第一線の岳州からやゝ後方のわが警備地區、廣い雑木林を後ろにひかへて勇士たちが大量で炭を焼いてゐる。

北支那の戦線に比べれば晝間の寒さはさほどではないが、夜になると猛烈な寒氣が襲つてくる。警備の勇士たちはこの寒さを凌ぐためにはじめは薪を燃やして暖をとつてゐたが、敵に明りを見せる不利があり、内地で使ひなれた炭火が欲しくなつた。『炭焼きなら俺が知つてる』と奈ひ農學校出の專門家があつたので早速その兵隊の指導で炭焼きが始まつた。

このあたりは地形風物が全く内地そつくりで、炭を焼くにも楢や櫟の雑木林が多くて都合がよい。思ひ出したやうに聞えてくる銃聲を炭焼き唄の合の手に警備非番の勇士たちは本炭の自給自足に餘念がない。

4 ぶす〳〵と燻る土の山はそのまゝにして一週間もたつと煙がつひに出なくなつた。山の高さも低くなつた。『そら掘れ』と炭焼き司令は命令した。

5 スコップで少し土を拂ひのけると、出てきた、出てきた。眞黒な、なつかしい炭が。

6 どの山も、炭焼きは上出來、支那籠に長いまゝ入れて警備隊本部に運んでくると部隊長殿も『これは良い炭だ。今晩から暖かく寝られるぞ』と大喜び。

撮影 内閣情報部

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

黒暗の海面

蒋介石が日本の勢力を駆逐しようとした上海が逆に暴徒の手におちてから既に十五ケ月や暴徒は依然として横暴と非道の言論を恣にして暴徒の下に治安の歩を進め明朗な言論に向つてゐる紅ロサイドと明暗二相の封鎖をなしてゐる。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

色朗明の海上

⇧虹口文路の平和な一日。

街並をつゞる日の丸の下を日本のバスが通つてゐる、支那の貢包車も威勢がよい。行人の冬服にはあたゝかい陽ざしがふりそゝいでゐる。

⇧⇧幸福な支那人。老若と少女。衣食足つて礼節を知る。

⇧バスの通つてゐる路をもう一歩横に入ると人々の安居楽業のさまはなほ一層よくわかる。

⇩上海のガーデンブリッヂから虹口に一歩入ると日本の資本で新らしい乗合自動車が動いてゐる。ブロードウエイマンション下の起點から吳淞クリークの、その名も新らしい白川橋行のピカ〳〵のバスがクランクの音も軽快にカーヴを切つてゆく。

撮影 上海プレス・ユニオン及、内閣情報部

同じ支那の子供たちでも租界の浮浪兒にくらべて、こゝの子供たちは何と忠まれてゐることだらう。抗日教育はもう昔の夢。假校舎だとはいへこゝで子供たちは繪々として東洋平和の道を學んでゐる。

⇩エクステンションロード。片側は見るも無惨な市街戦の廢墟だが、乗合の通る路一つへだてた側はいつ戦争があつたか、そんなことはケロリと忘れたかのように賑はしてゐる。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Redords
http://www.jacar.go.jp/

カメラの生一兵 上

大陸の戰線には凡ゆる方面の人が動員され、凡ゆる方面に死線を越えて戰つてゐる。カメラ一つを生命にもつ勇士のそれと何ら變るところがない。こゝに運動する一文は昨春來徐州戰に「寫眞と兵隊」の火野軍曹と行をともにし、更に漢口攻略戰に從軍した中支派遣軍報道部寫眞班梅本左馬次氏が最近戰線からもたらした生々しいカメラマン奮戰記錄である。

★寒夜

戰線の夜寒に、ふと眼醒めて、寫眞を考へてゐる。土の冷たさは、腰から腹にしみわたり、肝臟だの何だと言ふ内臟を、冷やし切つてゐる。流れる寒さが、冷たい刄のやうに脊を切開いて、脊髓の白い神經に、凍る刄先をあてゝゐる。そしてふと寫眞と自分とが頭へ來る。

寒い。ガチ／＼と齒がなりさうになる。呑みとむ唾が、他人の口液のやうに不愉快だ。そして寫眞を考へて、別に何とも思ふわけではない。ほんとうを言ふと、眼が醒めた瞬間に、わが生涯と寫眞と運命と言つたものがかすかに頭の中を走つただけで今更考へるまでもないことだから、まだなんにも考へてはゐないのである。謂はゞ無我半醒うたたねのあとの氣持にすぎないのだが、こんな瞬間に一發くらつて、死ぬのなら死んでも好い。護國の鬼にはなれないけれど、佛になれさうな氣がする。

しゆるしゆるしゆるしゆると追擊砲の音が尾を引いて、だあん！と馬鹿げた音を立てゝゐる。前面の小松林の塞地になつた陣地だらう。此處から百五十米ほどはなれて居り、われ／＼はその方向に來る彈丸には死角の凹地に居るし、追擊砲なら敵を引きつけ引きつけ、決定的な打擊を與へる機會をうかゞつてゐるのではないかと思はれぬではないが、第一線に居ると、それほど餘裕のある戰爭をしてゐる氣配は見えない。すくなくとも素人のわれ／＼が見て、戰力にかけひきなど見えるものでなく、戰ひは常に全力である。戰端を開いてから、日曜日や土曜半休の氣分は許されないのである。

敵と味方がきわどいバランスを保ち、そして一歩一歩押してゆく。何もない一日でも、軍の壓力が休むことはできない。そしてそんな靜かな日でも、何處かで誰かゞやられてゐることが多い。西部戰線に異狀なき或る日、パウルが死んだやうなものである。

昨夜の夜襲は別の隊で、われ／＼の隊は昨夜戰鬪はしてゐない。しかし二名の重傷者を出してゐる。それらの兵は果敢クリーク以來のつはものである。當時自分ながら明日の生命を考へることのできなかつたものを、斑ひとつ負はずに、以來一年餘を戰線に送つてゐる勇士であるかもしれないのである。まことに戰線では、不思議な時に彈丸があたらず、奇妙な時に彈丸にあたつて死ぬことがある。

なかには變な兵隊があつて、上海戰で右手輕傷、南京戰で左手輕傷、徐州戰で右足輕傷、今度は早くも瑞昌で右足輕傷、今迄に四回病院へはいつて、いづれも輕くて濟んだと言ふのがあつた。そして漢口戰のためにとつてあつた右足は、もう口あけに厄をすましたから、もう大丈夫だと笑つてゐた。奇拔な話であると思ふ。かうした奇拔さは、死の場合にも當然起つてゐるのである。そんな場合、僕は戰爭そのもの、壯烈さを、ひし／＼と感じないではゐられない。

その日の攻擊で、僕はライカとローライと二個のカメラで、約八十枚の寫眞をとつた。同行の名取氏は、色寫眞と普通寫眞とで、やはりその位とつたと思ふ。すこし取りすぎるかも知れないが、この日は特別で、二人で徹底的にやるつもりだつたのである。

われ／＼は援護射擊に守られながら、分隊の兵と一緒に攻擊前進について行つた。雀が何十羽と集まつて、朝を喜んで居りでもするやうに、チュウチュウチュウと聞える彈丸の間をぬつて、一人また一人、ツツツと走つては伏せる。寫眞をとるのにもすくなくとも五秒から十秒はかゝる。この間にあたるならあたるが好いと、覺悟をきめざるを得ない。

展開して攻擊前進する兵と共にゆくことは、それほど恐ろしいことではない。あとで考へると氣持がわるいが、別に昂奮もしないで、冷靜な氣持でついてゆける。しかしひとたび本格的に敵から身體をかくし、全く安全な地位に立つと、非戰鬪員の自分にかへるものか、今度飛びださうとすると、實に恐ろしい。分隊と三十米の距離がはなれてしまつては、もうその分隊に追ひつく度胆がなくなる。僕と名取氏は、そのやうにして、途中で前進することが出來なくなつた。兵隊に比べて恥かしい話だ。その時、僕は生れつきのスロー・モーションの故に、完全な生命びろひをして、自分ながら嬉しくて、滿積だつたが、それが殊にいけない。僕等はそこにへばりつき、あとは望遠レンズに頼つた。

一匹の犬が、戰場にキョロ／＼と迷つてゐる。山の間の水田に、兵隊が身をかゞめ頭を伏せて時たま走るのと、硝煙以外には何も見えない。音だけの凄烈な風景の中に、一匹の黑い犬が、何處からともなく現はれいでて、間の拔けた中隊にぼんやり立つてゐるのは皮肉である。僕はむく犬に化けたメフイストフエレスかなんか連想してゐて、寫眞をとりそびれてしまつたが、實に殘念なことをしたと思ふ。犬は忽然と何處かへ行つてしまつないのである。かと思へば、名もなき野の花が、彈丸にはかなくも首を折られる。

僕達はそれから左翼へ移動すべく、凹地の水溜りを歩いて渡り、更に崖を飛び降りると、其處に友軍のトーチカがあつた。こゝへは敵の野戰車用の機關砲が飛んできてゐる。その前で僕等は、前進一歩前の少尉が、軍曹と一緒に折敷いて、軍曹たへを判じたり、所謂「戰機」とはこれだなと思つたり、動かざること山の如しの、武田信玄が好きになつたり、わかつたやうなことを言つたり、古い苦勞を共にした兵隊に別の戰線で逢つたり、部隊を渡つて一宿一飯にありつく呼吸、いはゞ仁義も覺えた。

だが、悲しいことにはその間にいろ／＼のものが慢性になり、ろくな寫眞もとれないまゝで、感じがにぶくならうとしてゐる。はじめて彈丸の下でシャツターを切つた時の熱情と昂奮が失はれ、器用に要領良く、兵隊で言へば戰爭上手になり、彈丸にあたる率もすくなくなつたと思ふ。はじめての時、シュッシュッと來てゐた彈丸が、鼻の先の樹の幹にあたつて、パシッと音を立て、僕は無意識にパッと顏を伏せた。頭をさげたつて間に合ふわけではない。支那さんへお辭儀をするだけの話だが、その時は火野葦平伍長と一緒で、僕のその光景を「麥と兵隊」に書かれてしまつた。

火野葦平は常に新鮮に物を感じる。彼はよく物に感心する男で駿馬の鳴き聲などには感にたへてゐたものだが、つまり詩人だからであらう。「麥と兵隊」に終始行を共にし、殆ど同じものを見、同じものを食つて、彼は僕の五倍も物を考へてゐる。過去に兵隊であり、それまでに半歲を戰線に送つた彼にとつての方が、僕に感じられるよりも戰爭と兵隊とが新鮮だつた。それが彼の作品である。詩人と言ふものは感心なものだ。

鬪線する敵のさゞり打ちが、激しくなり、弱くなる。蝋燭のわづかなあかりに、隊長をかこんで命令受領者達が緊張した顏をよせる。斥候が歸つてくる。味方の陣する塞地と敵の一文字高地との中間にあるクリークの深さを、自分ではいつてみてさゞり、あちらこちらに最良の渡河點をさがし求め、腰から下はずぶ濡れになつて歸つて來たのである。すこし慌てもの、口の下手な龜田と言ふ一等兵で、しかもその報告の内容は、微細であり具體的である。命令受領の場所と〇米ほど離れて、通信隊が電話器についてゐる。本部から明日の打合せに隊長を呼びだし、隊長は主張すべきことを強硬に述べてゐる。命令受領が終ると、傳令が闇に吸ひこまれてゆく。戰車隊から連絡に來る工兵からも砲兵からもくる。そして夜おそく月もない中を、最近内地から補充されてこの隊に配屬された少尉が五人、はる／＼と到着し、隊長と十分ほど話したゞけで、闇に陣する所屬の部署へ消えてゆく。電話器は明日の天氣豫報を受けてゐる。そしてすべてに伴奏するやうに、激しくなり弱くなる機銃の音。

それらの狀景は戰線で繰返されてゐる平凡な一夜にすぎないが、それでもせめてラヂオでゞも、眞實そのまゝ内地へ送りたいものだ。寫眞は棄權せざるを得ない。

寒い。夜明けにはまだ間があるのだらうから、もう一度寢なければならない。小便をすればいくらか暖かくなるだらう。起きる。歩哨がぢつと動かない。ヒューと流彈が頭の上を通る。と、曳光彈がスーッと右翼へ飛んで、流星のやうに消える「もう白が出さうなもんです」と、歩哨が言ふ。曳光彈は赤だの青だので、射擊、方向、襲擊などの命令をつたへるのだが、正面の敵の場合は、白が退却の合圖らしいと言ふのである。久しぶりに曳光彈を見て、僕は「麥と兵隊」の孫圩で、敵襲に眼醒めた時を思ひだした。あの時は、これは大變だと思つてゲートルを卷いてゐる眼の前、五六米のところに曳光彈がスーッと來たのである。僕はそれが何を意味するどころか、そんな彈丸があると云ふことも、何もしらない。その時はじめてお眼にかゝつたのである。その色は赤かつた。

三十秒後、彼等は前進した。しかし次の瞬間、少尉は機關砲に、手と足首をやられた。七八米歩いたばかりのところである。少尉が繃帶をうけてゐるところをも、僕等は寫した。しかし、そのフイルムだけは、カットしてしまひたい氣持になつた。昨日内地から補充されてきた五人のうちの一人である。

その日の攻擊は、敵の陣地を奪取するところまでやりとげるに至らず、まん中のクリークまで百米あまり第一線が出たばかりであつた。第一線はクリークに腰までつかりながら、夜を迎へるのであらうと思ふ。戰死はわれ／＼の隊で五名、なかには昨夜クリークまで偵擊に行つた龜田と言ふ一の下手な一等兵もゐる。その戰死の狀況を聞くことは出來なかつたが、聞くまでもなく彼は小隊の誘導者となつて、一番さきに走つて行つたものであらう。そしてやられたのにちがひない。

生と死の問題は、嚴粛であるが、戰線では嚴粛な何の問題もないと考へる。小松林の陣地で、闇に眼を光らせ、鐵兜の紐を頬に喰ひいらせ、泥まみれになつて寢もやらぬ兵隊に、濟まないと思ふ。

追擊砲は五六發つゞけて來る。更に二百米ばかり向ふの、一文字の塞地に居る敵は、六門位の追擊砲を持つてゐる。その向ふの山には野砲が居るのだが、そいつは打つて來ないらしい。それよりもわれ／＼の右翼四五十度後方の銃聲はどうだ。タタタタタタと言ふチェッコ機銃の音が、何十種も重なり合ひ、もつれ合ひ、追つかけあつて聞える。

タンタンタンと彈んでゐるのもあるし、なかにはコンコンコンと、あれで鉛の彈丸が飛びだしてゐるのかと思へるほど、やけに輕くひゞいてゐるのがある。角度と反響の工合でさう聞えるのだらう。火藥と銃口と鉛の音樂になつてゐるダッダッダッと言ふ友軍の重機の音は、低音の伴奏のやうに、だが今晩は小銃も輕機も盛に打つてゐる。それどころか、今打ち合つてゐるのは右翼の友軍の夜襲決行なのである。朝までに右翼が出てわれわれと頭をそろへ、そして明日は全線の總攻擊にならうとしてゐる。好い天氣になつてくれゝば好いが、萬の空には雲が低いし、空氣はしめつぽい。しかし降りはしないだらう。何とか好い寫眞をとつてみようではないか。

僕は今度の戰爭の始めごろ内地に居て、不愉快で仕方がなかつた。だいたい僕は惡い癖で、一口に「彈次馬の年に生れたから」と言ふが、事を好むのである。それが戰爭ともなれば、片々たる「事」どころか、民族の運命であり、世紀の主題なのである。事を好むばかりに寫眞家たる幸福を感じてゐたものが、この戰爭に忘れられ、近よれないのは悲しい。そんなことを、思ひあまつて何處かに書いたら、それが活字になるよりも早く、彈會が來て、僕は中支戰線へ來てゐた。まことに寫眞家たる幸福をあらためて感謝したことであつた。

それから十ケ月、戰爭もいくらかわかるやうになり、彈丸の音の聞きわけに始まつて、敵の手どと一緒に攻擊前進について行つた。雀が何十羽と集まつて、朝を喜んで居りでもするやうに、チュウチュウチュウと聞える彈丸の間をぬつて、一人また一人、ツツツと走つては伏せる。寫眞をとるのにもすくなくとも五秒から十秒はかゝる。この間にあたるならあたるが好いと、覺悟をきめざるを得ない。

展開して攻擊前進する兵と共にゆくことは、それほど恐ろしいことではない。あとで考へると氣持がわるいが、別に昂奮もしないで、冷靜な氣持でついてゆける。しかしひとたび本格的に敵から身體をかくし、全く安全な地位に立つと、非戰鬪員の自分にかへるものか、今度飛びださうとすると、實に恐ろしい。分隊と三十米の距離がはなれてしまつては、もうその分隊に追ひつく度胆がなくなる。僕と名取氏は、そのやうにして、途中で前進することが出來なくなつた。兵隊に比べて恥かしい話だ。その時、僕は生れつきのスロー・モーションの故に、完全な生命びろひをして、自分ながら嬉しくて、滿積だつたが、それが殊にいけない。僕等はそこにへばりつき、あとは望遠レンズに頼つた。

一匹の犬が、戰場にキョロ／＼と迷つてゐる。山の間の水田に、兵隊が身をかゞめ頭を伏せて時たま走るのと、硝煙以外には何も見えない。音だけの凄烈な風景の中に、一匹の黑い犬が、何處からともなく現はれいでて、間の拔けた中隊にぼんやり立つてゐるのは皮肉である。僕はむく犬に化けたメフイストフエレスかなんか連想してゐて、寫眞をとりそびれてしまつたが、實に殘念なことをしたと思ふ。犬は忽然と何處かへ行つてしまつないのである。かと思へば、名もなき野の花が、彈丸にはかなくも首を折られる。

僕達はそれから左翼へ移動すべく、凹地の水溜りを歩いて渡り、更に崖を飛び降りると、其處に友軍のトーチカがあつた。こゝへは敵の野戰車用の機關砲が飛んできてゐる。その前で僕等は、前進一歩前の少尉が、軍曹と一緒に折敷いて、軍曹

★生死

武漢はまだ／＼遠い。この調子で敵が頑張るものなら、いつまでかゝるものか、ちよつと見當がつかない。しかし上海戰が大場鎮陥落と共に、あとは次第に追擊戰になつて行つたやうに、何處かの線が破れゝば、あとは早いにちがひない。大冶の一線だらうと言ふのが、記者仲間の評判である。武漢攻略のはかどらないのを見ると、軍は或はるものが他にあまりにも多い。生死が日常の人生で嚴粛なのは、生きようとする本能と努力とが、純一無二の美しさを持つてゐるからであらうと思ふ。しかし戰爭では、特に攻擊面の戰鬪では、生きようとする「努力」は、敵を殺すと言ふ「任務」の達成に代置される。その方が大きく重いのである。だからこの場合、死ぬことが恐ろしいなどと言ふことは、鬪志ある兵隊には思ひもよらぬことらしい。彼等と言へども、時をへて考へてみればわれながら恐ろしいことをやつてのけたのに驚くであらう。

戰場で生と死をみつめるのは、防禦の場合であらう。寡力よく奪ひとつた敵の陣を、本隊の來るまで守りとげることは、時に甚しき困難に遭ふ。こんな場合、自分の生きることが、陣地を守りとげることであり、最重要な任務である。守りきれなかつたら死ぬ。文字通りの死守だ。襲擊された兵站線を死守する場合もある。

戰爭の死は、運命があり偶然があることも事實にはちがひない。あまりにもさうした場合が多い。だから戰鬪に訓練された兵隊ほど、細心な注意をはらふ。死を恐れるよりは、無駄になることを恐れる氣持だ。犬死、これが一番恐ろしい。にも拘はらず、運命的に不運な、偶然にも殘念な死がある。しかし運命も偶然もひつくるめて、鬪志も敵意もひつくるめて、戰爭の勝敗は力學的計算にのぼるものなのである。

僕はそんなことを僕の勝手に考へ、寫眞をとつて歩いてゐるのだが、兵隊はそれ／＼にもつとよきことを、もつと奇拔なことを、もつと嬉しいことを考へてゐるのであらう。彼等の悟り切つた顏を見ると、微笑せざるを得ない。その疲れ切つた靈魂の寢顏は、ほとけにさへも似てゐるのである。

——（續　く）——

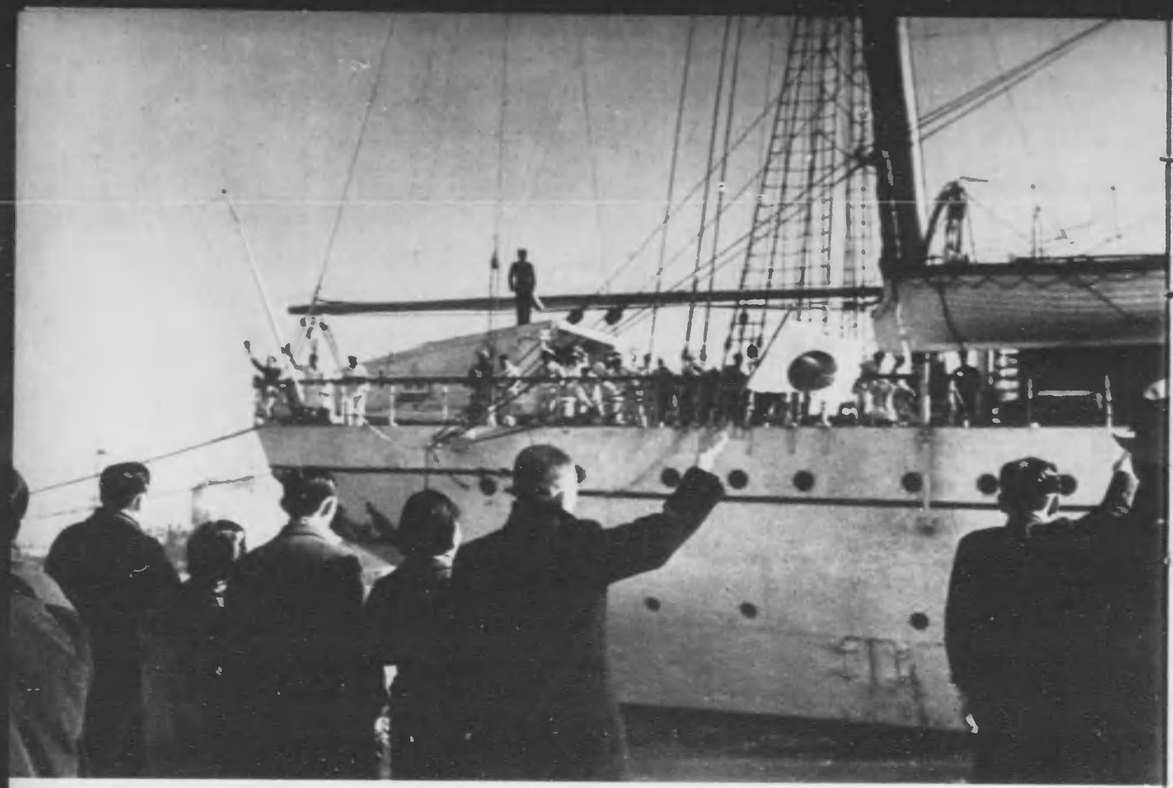
梅本左馬次

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

★ 南十字星の下へ ★

文部省練習船東京港出帆

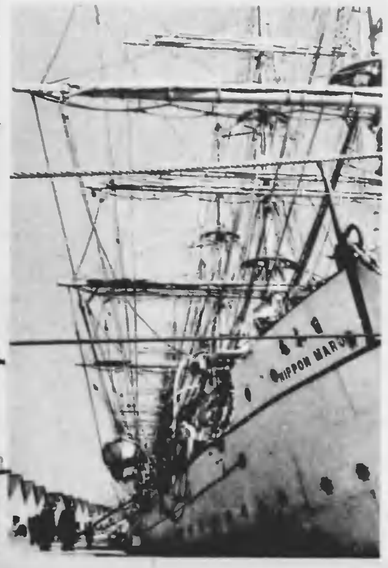
撮影 内閣情報部

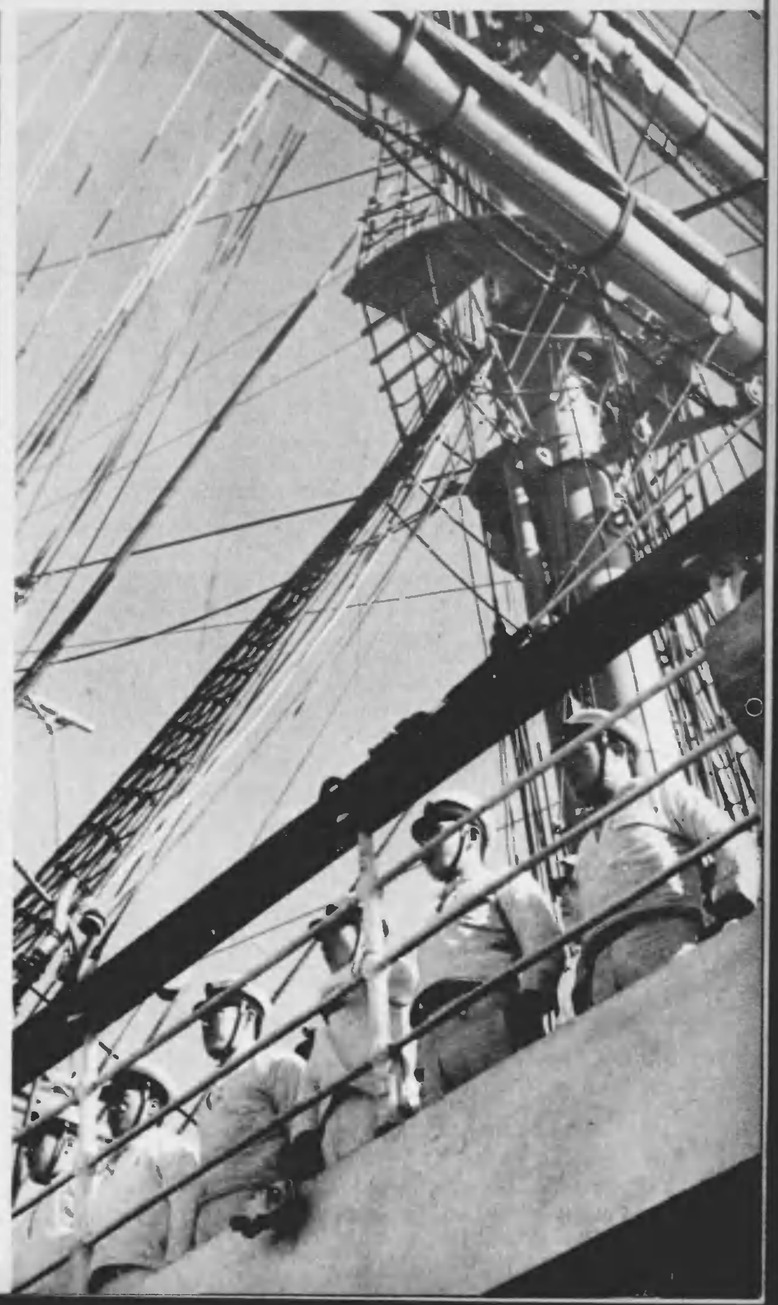


⇨ 麦風吹きすさぶ中を出帆位置につく。はり切つたその顔。その瞳。

⇩ 出帆直前の日本丸、後が海王丸。

岩壁にうちふられる日の丸を眼の奥深くやきこんで『行つて参ります。』『御機嫌よう！』





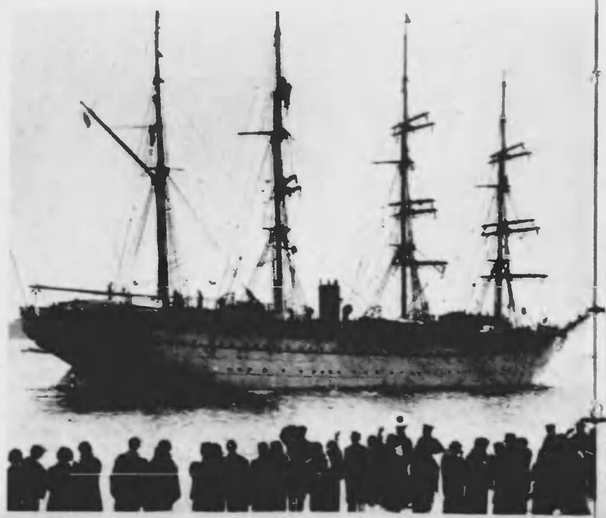
練習船 南海へ鹿島立つ

黒潮おどる南の海をめざして日本丸、海王丸の二隻の文部省練習船は元気一ぱいはち切れるばかりの若いマドロスを乗せて一月十二日午前十一時東京芝浦岩壁を出帆、日本丸を先頭に晴れの第十九次遠洋航海の壮途にのぼつた。

航海科の卒業生等百十五名をのせて日本丸は全国八つの公立商船學校南洋群島クサイ島とサイパン島へ、又海王丸は百十二名をのせて沖縄県奥那覇と南洋群島トラック島へと鹿島立つた。全航程六千浬、三月二十日頃潮釣けの海の子たちは東京に帰る。

『写真週報』特派カメラマン松本要之助君も日本丸に乗船勇躍出発した。なほ一月十八日、日本丸から東京着電によれば、日本丸は豫定よりずつと早く、東經百五十三度、北緯三十一度の地點（小笠原の諸島東北東）にあり、一同非常に元氣であると。

⇦ 海の子たちの壮途を見送る大日本海洋少年團總長竹下海軍大將。



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

海外通信

寫眞協會

⇨豪快な帆走スケート

スケートの醍醐味はその素晴らしいスピードにあらう。そこでこの快速をうるためにベルリン近郊のスケート場では帆走スケートが流行してゐる。スケーターは風の向きによつて巧みに帆を操りつゝ、鏡のやうな湖面をヨツトとスケートの二つの豪快味を味はひつゝ物凄いスピードで滑り廻る。

⇦アメリカに世界一のダム竣工近し

北米アリゾナ州のヴアード河にかねて巨萬の工費を投じて建設中のペートレツトダムが早くも八分通りの竣工をみた。このダムが竣工の暁には二十萬エーカ呎の水を湛へうる世界一の豪壮なダムで、附近廣大な不毛の土地に灌漑して沃野と化さんとする合衆國の大開發計畫によるものである。

⇧書問は女工さん、夜は舞踊家

ハーケンクロイツの旗が翻へるようになつてからオーストリアにもナチスの重要國策の一つである體位向上が喧しく叫ばれてゐる。首都ウイーンは流石ワルツの都だけあつて、女工さんたちは夜になると公會堂に集つて體位向上と健全な娯樂を兼ねて優美なウインナーワルツを踊りつゞけてゐる。

杉村前駐佛大使歸國の途につく ⇨

昨秋米病を得て靜養中であつた前駐佛大使杉村陽太郎氏は歸朝することになり昨年十一月十四日フランス官民多數の見送りをうけて家族同伴パリを出發、故國に向つた

獨佛不可侵條約調印さる ⇦

青嵐十二月六日、獨外相リツベントロップ氏はパリを訪問、フランス外務省『時計の間』でボンネ佛外相との間に獨佛不可侵、非戰を旨とする歴史的共同宣言に署名を行つた。普佛戰爭、歐洲大戰と五ひに深刻な反目鬪爭をつゞけてきた獨佛兩國はかくてこの宣言を礎として友好親善の握手を交すことゝなつた。

滑つて　轉んで

1

1　ドイツ、ポツダム市郊外。とんがり帽子をちよこんと冠つてこれは天晴れ豆スキーヤー、『あたしはこれでも名譽あるドイツ小國民なのよ』

2　勿體らしくスキーを履いて、「そら滑るわよ」でもちよつと服付きが變ですね。

3　やつぱりいけませんね。なに、今日がはじめて？　それなら御もつとも、勇敢に尻餅をおつきなさい。明日は滑れます。

3

2

1

1　これはアメリカ、セントルイス生れのメリー・ルー・リットルちやんといふ生後わづか十五ケ月の天才スケーターでございます。

2　床の上ならお茶の子さいさいでさへ、なに平氣ですよ。

3　あツ！　たう〜〜轉んちやつた。あんまりスピードを出し過ぎたかな。でも大丈夫、こんなこと位でメリーちやんが泣くもんですか

2

3

写真協會

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

社團法人 信託協會

★海外の内及び全「同盟ニュース」の綜合編輯誌

★事實の正確なる記録！

★研究・批判・立策の基礎的資料!!

この十日間の出來事は？ 世界の動きは？ 皆さんは新聞を御覧になつて「切抜」を作りたいと御考へになりませんか。その大變面倒な仕事を本書に任めるのが「同盟旬報」です。

各自の用途に從つて自在に活用出來るように整理されて居ります。日刊新聞で屑切れになつた記事の紙束や掲載されない良い記事も本誌に收錄されてゐます、殊に今日誰でも知りたい海外論調や國際關係記事は旬報の獨壇場です。時代の明確な記錄、活きた資料として官廳、學校諸會社は勿論、眞摯なる讀者の各書賣へ是非御備へ下さる樣切望いたします。

★實物見本進呈

（御申込の方には切手六錢對入御申越次第見本を進呈に實物見本を進呈致します）

申込所

東京市京橋區銀座西八ノ九
社團法人 同盟通信社
振替東京八六番

〔主要内容〕

一支那事變特輯
一議會、政治一般、政府、政黨其他政治的、文化的諸要案の活動、政策並各方面の批判、政治、行政關係、調査資料。
一經濟一般、殊に經濟政策とその反響。
一世界各國事情、國際關係。
一海外論調。

▲月三回十ノ日發行
▲頁六錢利八〇頁
▲定價一部三十五錢
▲一ケ年前納十圓（送料共）
▲販賣所八全國各書店、本社各支社。

同盟旬報

第二卷 第三十六號（No.55） 一月十日發行

（昭和十五年十二月十日第三種郵便物認可）

主要記事

第七十四回帝國議會開會—
政府、對支國交調整方針宣明—
支那事變第七回論功行賞—
言西海軍戰闘始さる—
汪精衛國民黨を離脱す—
米國、對日新通商條約廢棄—
伊、佛伊協定廢棄を通告—
米國關係大戰以來の危機—

社團法人 同盟通信社 發行

讀者のカメラ

地方作品

⇨ 橿原の宮に八紘祭執行さる

京都市左京區　花野和三郎

神武天皇の御神靈間近く庶民に拜殿の御内まで參入御拜を差許される橿原神宮の八紘祭は小春日和の一月十一日から記念すべき第一回の御儀を執り行はせられた。聖國の聖地は森嚴の氣滿ち、參拜の民草は感激のうちに皇國の彌榮を祈り奉つた。

讀者のカメラ 應募規定

一、題材　國民精神總動員をテーマとした報道寫眞、一枚にても組寫眞にても可
二、印畫の大きさ　なるべくキヤビネ判程度が好ましく、裏面に寫眞說明及び住所姓名明記のこと
三、締切　毎週火曜日
四、賞品　內閣情報部賞牌又は金五圓以上の賞金を呈す
五、應募作品は一切返戻せず、また掲載寫眞印畫の版權は當部に歸屬す

⇨ 掲示板に寫眞週報

大阪市役所

三百萬大阪市民の戰時市民生活運動の活動實況は、既に數回寫眞週報に掲載され廣く全國に紹介されましたが、地元の大阪市役所では入口の掲示板に寫眞週報のこの頁を貼出し、市民の働きが認められたことを知らせました所、非常な好評でした。

バッチ召しませ

岐阜縣船津町　星野清流

大陸の戰線に縱橫の活躍をつゞけるわが荒鷲部隊に對する感謝と感激はこゝでも深く、町の少年少女たちが軍用機獻納資金募集のために街頭で愛國バッチを賣つてゐます。街を行く男も女もこの委に行いて、少年少女たちが、涙ぐましく、胸をうたれて進んで買つて行きます。

鹵獲戰車の大行進

東京市京橋區　松田　傳

一月八日陸軍始觀兵式後戰車隊の市中大行進は數萬市民の熱狂と歡呼をわき起したが、この行進に加はつた鹵獲支那戰車は、わが勇士の輝かしい戰功を生々しく市民の胸によび起させた。

寫眞週報（禁轉載）

昭和十四年一月二十五日印刷發行

編輯者　內閣情報部
東京市麴町區永田町
內閣總理大臣官邸內

印刷者　內閣印刷局
發行者　東京市麴町區大手町

一部十錢

定價
半ケ年（前金）二圓四十錢
一ケ年（前金）四圓八十錢
（外國郵便に依る場合は一ケ年九圓十二錢）
郵税不要
半ケ年分未滿配送御希望の方は一部十錢の割合を以て前金を添へ御申込み下さい

申込所
內閣印刷局發行課
電話丸ノ內(23)三五一一九
振替東京（九〇〇〇）
全國各地官報販賣所
東都書籍株式會社
各書店・驛賣店
各新聞販賣店
寫眞材料店

訂正
第四十七號一頁に「寫眞週報」とあるは「寫眞」の誤植につき謹んで訂正いたします

★表紙——

これは一體何だらうか？ 漢口攻略戰に働いて たわが十五サンチ榴彈砲の 砲身だ。敗敵に思ふ存分巨 彈を浴せかけた後、いま勇 士の手で拭ゆいばかりに磨 き磨かれた所だ。鼻のてつ べんに油をくつゝけた勇士 の顏がにつこりと向ふから 覗いた。

『こんどは何處へぶつ放し てやるかなあ』

撮影 內閣情報部

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

官報號外 昭和十三年二月十二日 第三種郵便物認可 昭和十四年一月廿五日印刷納本 (毎週一回水曜日發行) 第四十九號

ムシ歯・歯槽膿漏を防ぐ強力殺菌作用！

用藥

磨歯ブラク

他にありや！
この殺菌・藥効歯磨！

八大專賣特許

クラブ歯磨の所有する歯磨のみの專賣特許

第一〇一九七一號 酸素を含有せる歯磨
第一〇一二一〇號 オゾンを含有せる歯磨
第一〇二四三三號 過酸化水素を安定なる狀態に於て含有せしめたる歯磨
第一一五一六二號
第一一六六四一號 新殺菌劑クローカルヴアクロールを含有せる歯磨
第一一四七四四號 新殺菌劑ヨードチモールを含有せる歯磨
第一一四一一九號 クロラミンを抱合せる歯磨
第一一五七〇〇號 銀コロイドを配合せる歯磨
特許出願中 レントゲン照射に依つて誘起したる藥品を應用せる歯磨

（判倍「報道」・A4格損定価はさ大の書本）

内閣印刷局印刷發行